

### Ⅲ 進学指導についての一考察

大学進学を目前にした高校生が、どの大学を選ぶかきめることに関連して将来の職業や方向を考えるのに二つの型がある。その一つは、自己の将来の職業について、はっきりした適性の判断や未来像を持ち、それに適合した大学への進学を目指すものである。今一つは、そうしたものを特に持たないで、とりあえず合格するところへ進学することを先決と考えたり、又は適性や希望があっても、学校の格というようなものをそれより優先させて大学を選ぶものである。実際には、この二つの立場を両極において、その中間的、折衷的な様様な考え方や選び方をするわけであるが、ここでは問題をはっきりさせるために、その両極についての特質や長短を明確にしてみたいと思うのである。

一般的に進路指導によって生徒の適性を見つけたり開発したりして、それを社会の職業に適合調和させてゆく方向に進むのは、即ち、上記の中の前者の型の生徒を考えることである。そしてそれは、少くとも或る程度は高校時に行われるのがよいとされてもいるし、大学進学にあたっては、その線にそった学校学部の選択が考えられなければならない。しかし、これには職業や適性に対する判断が正しいということが不可欠の条件であろう。これが不正確であった場合は、大きな問題を残すことになるのである。しかしその正確な判断が、そしてその指導が高校修了までの時期に可能であるかどうかという疑問を持たないわけにゆかないのである。

一方、希望や適性についての考えを持たず、又は持っても考慮せずに進学する型の生徒については、将来の予想しない職業に対して適応する能力と意欲的な性格を持った者でないかぎり、その人の人生の充実や社会への貢献について危惧を懐かざるを得ない。

そこで、この問題に少しでも解明を加えることができれば、という考えから、この研究を行うことにしたのである。

ここに示す資料は、東海地区の大学の中で、3つの国立二期校の学生 466名について行ったものである。その学部別の内訳は、農27, 工81, 医47, 教育 311である。1, 2年男女混合であるが、学年及び性別による結果の差異はほとんどない。学部ははっきりした専門職に進むような方向のものをなるべく選び、又入試の制度のため、適性や希望があってもそれに適合しない学部に進まざるを得なかったという型の学生が比較的多いのではないと思われる二期校をとりあげたのである。以下の各表の数字は%を表わした。学部制対応の表で実人数が極めて少ないものは除外したが、計の

欄では、それも含めた全学部の合計をあらわした。

( )の中の数は、実数が10名以下であるので一般的傾向としては考えることができないものである。

表1においては、④大学入学前に将来の希望をはっきりきめている者、⑤ははっきりしないが広い範囲でよく然とはきめて入ってゆく者、⑥きめていてもその方向と異った方へ進んだもの、⑦全然きめていなかった者の割合を表す。たとえば医学部進学者が希望を定めて入学するものがもっとも多いことなどである。

(表1)

	④明確に	⑤ばく然と	⑥異なる方向へ	⑦決めないで
農	(18)	49	(4)	(28)
工	31	58	10	(1)
医	75	16	(4)	(5)
教	33	36	26	5
計	37	39	18	6

表2は、上記表1の④欄の者のみについての資料である。彼等の入学後1~2年の間の勉学・習練・将来の方向に対する見聞のひろがり、自己評価のふかまり等によって、入学前に決めていた希望が、如何に変化するものであるかを示すものである。左端の(より確実)は、将来の方向について、はっきりきめていたものが、更に一層自信を持って確実化したものであって、その次の(変らず)と加えれば、計において、実に95%の者が迷いや挫折感を持たないで、そのまま希望を持ちつづけていることがわかる。それは非常によい傾向であることは言うまでもないが、これが入学前の適性判断の正確さを表わすとは必ずしも言えない。

(表2)

	希望の変化				将来に対する自信、意欲			
	より確実	変らず	自信失う	希望変更	もつ	多少もつ	もてない	わからず
工	(25)	63	(3)	(9)	68	(24)	(8)	
医	42	55	(3)		84	(16)		
教	28	68	(2)	(2)	64	29	(2)	(6)
計	31	64	2	3	69	24	(2)	(3)

表3は、表1⑤欄の者に対する同様の調査であって、ばく然と広い範囲で希望をきめていた者が、入学

して、その限定された学部学科の方向に対して適応してゆく状態が表されている。

(表3)

	希望の変化				将来に対する自信や意欲			
	確定	大体決定	自信失う	希望変更	もつ	多少はもつ	もてない	わからない
農	23	77			62			38
工	(16)	72	(7)	(5)	55	23	(9)	(14)
医		90		(10)	(50)	(20)	(20)	(10)
教	12	80	6	(2)	34	49	(4)	9
計	13	79	5	(2)	43	38	6	13

表4は、表1㉔欄の、将来の職業についてある希望を持っていた者が、第1希望校の受験に失敗したりして、その最初の希望に合わない学部に進んでしまった者に対する調査であって、こうした者が、希望しなかった方向に対してどの程度適応して行けるものであるかということを示すものである。この中で積極的に適応する者は、自己の適性の予想しない一面を入学後発見したものであるか、適応する能力の広さを表わすものであろう。その右欄は、消極的に、やむを得ず、あきらめてその方向へ進むものである。明瞭に不適応を起してゐる者が4割もあることは、おもしろくない傾向といわなければならないであろう。

(表4)

	現在の学部に対して				将来に対する自信や意欲			
	積極的適応	消極的適応	自信なし	希望変更	もつ	多少はもつ	もてない	わからない
教	16	42	24	18	23	46	18	(14)
計	18	41	24	17	27	46	16	(11)

表5は、表1㉕の者、即ち、方向を決めずに入学した者に対する同様の調査である。これには、希望を決めようとしないう無気力な生徒、特技や特定の学科などに対する興味を持たない特徴のない生徒、または何にでもなれる自信をもったむしろ自信のある生徒、など、いろいろな型が考えられるが、それが入学後どうなってゆくかということの調査である。絶対数が少くあまり明瞭なことはわからないが、1～2年経た後

(表5)

	現在の学部に対して					将来に対する自信や意欲			
	積極的適応	消極的適応	自信なし	希望変更	未決定	もつ	多少はもつ	もてない	不明
計	(7)	44	(19)	(4)	26	44	(26)	(11)	(19)

でも、まだ希望がその方向へ決まらなかったり、自信がもてなかったりするような者が多くて、あまりよい傾向を示していない。

表6は以上の各型のそれぞれの合計をならべて比較したものである。積極的適応、消極的適応等の項目は、各型によって多少の相違はあるが、比較のために無理に同列にならべたものである。例えば㉔型における消極的適応は、入学前の明確な希望が、そのまま変わらずに持続しているという意味のもので、質の上では、他の型における積極的適応にむしろ近いかもしれない。そのような相違をも考慮に入れて見れば、この数字よりも更に強く、㉔㉕㉖㉗の順序でよい傾向を示していることがわかる。なお、不適応の欄には、自信をなくした者、他の方向を希望する者、未決定の者等をまとめた数があらわしてある。まとめてみると㉕における不適応の数は非常に大きくて、こうした考えによる進学が大変危険であることを示している。

(表6)

	希望の変化			将来に対する自信や意欲			
	積極的適応	消極的適応	不適応	もつ	多少はもつ	もてない	わからない
㉔	31	64	5	69	24	2	3
㉕	13	79	7	43	38	6	13
㉖	18	41	41	27	46	16	(11)
㉗	(7)	44	49	44	(26)	(11)	(19)

上記㉔～㉗の分類は、受験の前に、自分の将来の職業についてどんな映像を描いたかということによって、その映像というものが㉔にしても㉕にあっても、必ずしも正確な適性の判断に基いたものであるとは思えない。せまい見聞の中で選ばれたり、一時的な感激で適性だと思ひ込んだり、受験雑誌のわずかな知識で決定されたりしたものが多いと思う。現在の高校教育では、そうした指導が具体的になされる場所が一般的にはほとんどないからである。そのような確かでない決め方によるものであるにもかかわらず、これらの表の示すように、入学前に希望をはっきりさせている方が、後によりよい傾向を示すということから、種々の問題点を考えてみないわけにいかない。しかしながら、この調査からは、そうした幾多の問題点に対する解答を導き出すことはできない。

唯一つ言えることは希望を持つことの必要性である。希望は意欲の原動力となり、意欲が適性に転化する筋道は充分考えることができる。したがって希望を持つことは、或いは資質、能力等よりも大きな力をもって適性を形成するかもしれない。大学4年間の在学期間が終りに近づけば、不適応者も次第に適応して、

## D. 継続的・計画的な指導についての研究

大部分が無難に社会に出て行くものであるといわれるが、遂に不適應のままで終る例も又少なくないようである。進路指導では、そのようなよくない結果になる可能性のできるだけ少い方向を求めなければならない。又適應するにしてもそのし方が問題であり、なお意欲的な学習や習練にスタートする時期を早くする、その

ために希望を早く持つことが大切であろう。

希望を与える指導とは、希望が将来瓦解するものにならないために、できるだけ正確な能力、即ち適性の発見や啓発ということが、そこで行われるものであろう。(中野満男)

# Ⅳ 適性と進路指導

## 1. 進路指導の本質

生徒の卒業後の進路は、究極的には生徒個人の問題であり、生徒みずからの判断で決定すべきものであることは論をまたない。したがってそういう前提に立って進路指導を考える場合、そこに指導の範囲ないしは限界といったものを考えておく必要がある。

従来からこの学校においても、学力成績をもとにしての進路指導はかなり徹底して行なわれている。校内外模試は、あるいは拍車となり、あるいはあきらめ的手段となって、進路決定上重要な役割を果たしている。このような学力面からの進路指導も、今日の現状では必要なものと考えざるを得まい。しかし進路指導の本質はその生徒が将来社会に対して果たす役割というものを究極の目標としてなされるべきものである。単に学力だけからの判断ではとうてい個人の可能性を予測することはできない。平素からの学習指導や生活指導を通じ、自分みずから適確な判断を下せるための資質・能力・習慣をつけておくことが、進路選択決定を自主的に行なわせるための不可欠な条件である。進路指導はいわばそのような諸指導の最終段階としてとらえるべきであり、平素の学習やホームルームなどの活動と有機的なつながりを持つべきものとする。

## 2. 適性の意義

一口に適性と言っても、それがどういう意味なのかかなりあいまいなものが感じられる。ここでは学力成績とは別のもの、すなわち各個人の持つ先天的あるいは後天的の性格的諸特性ということに限定して考えることにしておく。ただしこれを進学希望者を対象にした場合、そこに学力成績と何らかの関連があることもたしかであろう。一定の学力水準に達しない者が、文化系であれ理科系であれ、大学教育そのものを受ける適應能力を欠いているのは当然のことと考えられる。すべての者は、等しく大学教育を受ける能力を有するものであるという前提でことを考えるのならば話は全く別である。ところが現実には、どう見ても大学教育を受ける能力学力を有しない者が進学を希望し、えり

好みさえしなければ必ずどこかの大学へ入学して行くのである。進学そのものへの適性の目安は学力ばかりではない。勉強意欲とでも言うかより高い学問への志向といったようなものが必要なのではないか。この点からみても、不適者が多数大手をふって進学している。こういう広義での（あるいは根本的な意味での）適性はややもすると問題外にされがちである。

狭義での適性を考えるなら、ことは比較的単純である。理科系・文化系・家政系などの学部系統への適・不適ということになる。理性・感性・根気・ねばり・集中性などの特性がその手がかりとなろう。問題は生徒個人個人が、自己の特性をどの程度正確にとらえているか、またその特性と志望進路とをどれだけ関連づけて考えているかということである。また指導する立場からすれば、生徒個々の特性をどの程度知り、それをどのように指導するかということが問題である。そこで適性の判断がどのようになされ、どのような問題をかかえているのかを考察してみたい。

## 3. 適性の判断の現実

受験生が何を進学の目的としているかを調査してみたところ、本校生徒の場合、最も多かったのが、「就職の条件をよくする」ということ、第2に、「専門的学問技術」第3に「一般教養修得」ということであった。同様な調査を名古屋大学学生に対してなされたのを見る機会を得たが、それによると、専門的学問技術、一般教養修得、就職条件の順になっており、就職条件をさほど重視していない傾向がみられるが、ある程度将来を約束されたエリート大学という見地からのものであって、全体的な立場からみれば、むしろ本校のような上下すべての成績階層を含む受験生による結果の方が、平均的な考えをあらわしているのではないかと思われる。むしろこのような目的はそれぞれ単独で存在しているわけではなく、程度の差こそあれ、各人が共通して持っているものであろう。それでも、今日の進学の目的は、第1に就職のことがあり、専門的学問技術が第2位になっていることはたしかであると